

独立行政法人国立国語研究所「外来語」委員会 第17回
議事要旨

1. 日時 平成16年8月30日(月)14:00~16:00
2. 場所 国立国語研究所会議室
3. 出席者 甲斐委員長, 相澤委員, 倉島委員, 神津委員, 古賀委員, 小森委員,
柴田委員, 陣内委員, 関根委員, 田中委員, 長谷川委員

4. 会議の概要

(1) 第3回最終発表について

最終発表原案の最終的な審議を行った。その結果、「ロードプライシング」の言い換え語を「通行課金」から「道路課金」に改めるなど数か所の変更を決定したほか、「ドメスティックバイオレンス」については、さらに慎重な調査・検討が必要とし、提案を第4回に先送りすることとした。

したがって、第3回最終発表は、「ドメスティックバイオレンス」を除いた32語について行うこととなった。

(2) 第4回提案のための作業手順について

第4回中間発表原案の作成に向けて、今後の作業内容の説明と日程の確認を行った。

5. 会議での主な意見

第3回中間発表後、特に問題となった3語について

イ. 「ドメスティックバイオレンス」

新たに出された「親密者暴力」も、「親密」と「暴力」とが意味的に結び付きにくいため、落ち着きが悪い。さらに言い換え語を検討すべきである。

「近縁者」などの言葉では、今後の法改正や日本の家庭状況が変化した場合に対応しきれなくなる可能性がある。「家庭内暴力」を立て、その上にいろいろな形容を付けて用いることも考えられるが、提案自体を先送りしてはどうか。

先送りするにあたっては、「ドメスティックバイオレンス」を外来語導入の重要な一類型ととらえ、その特質を明らかにすることを視野に入れての先送りとしたい。

法解釈が拡大し、「配偶者間」だけでは収まらなくなっている。社会現象を追いかけて訳語を考えるのはナンセンスに思うが、もう少し時間をかけて検討してはどうか。

「DV」という略語の存在が概念の定着に寄与している。略語「DV」も、合わせて検討すべきではないか。

これまでの日本の法律や習慣では内輪の問題として片付けられていた事柄である。そのような日本の文化や習慣をくつがえす概念であるために、日本語になじみにくいのは仕方がない。

「ドメスティックバイオレンス」という語の意味自体が非常に曖昧かつ広範であることに加え、その対人関係や社会における意味が非常にゆれている。意味範囲が限定できるまで提案を先送りし、様子を見てはどうか。

ロ。「ユニバーサルデザイン」

「万人向け設計」の「万人向け」にはマイナスのイメージがあるとの声もあるが、「万人向け」とは「ありきたり」ではなく「皆にやさしい」という意味であり、問題はない。

ハ。「ロードプライシング」

「通行」だけでなく「駐車」に対しても適用される制度であり、「道路課金」がふさわしい。

その他の語について

「パブリックインボルブメント」は「住民参加」「市民参加」のように「参加」を使って言い換えてしまうと意味合いが軽くなる恐れがある。「住民参画」「市民参画」と「参画」で言い換え、住民や市民を積極的に巻き込んでいくことに意味を限定した方がよい。

「ボトルネック」のその他の言い換え語に掲げた「隘路」の「隘」は常用漢字でなく、新聞では使用を避ける努力をしているものである。手引きには、その点をもう少し強調して書いた方がよい。

第4回提案の作業手順について

各語の意味区分について、細かく区分した言い換えを検討するのか、すべてを包括する言い換えを検討するのか、委員会としての姿勢を決めるべきではないか。

以上